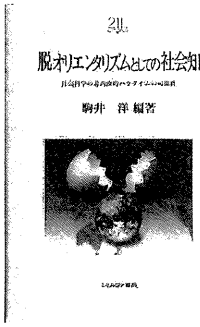
私の一冊

駒井　洋

「脱オリエンタリズムとしての社会知」

駒井　洋編（ミネルヴァ書房　1998）

〔中央図：301-Ko57〕



オリエンタリズムと名付けられた言説の存在はサイードにより指摘されたものであるが，かれの問題提起は世界的にもますます大きな反響をよんでいる。オリエンタリズムとは，西欧産の学問が非西欧を対象とするとき，それは例外なく非西欧を支配するための権力的言説として構築されてきたとするものである。しかしながら，サイードはオリエンタリズムの批判をするのみであって，それに対抗しうる言説についてはまったく考慮していない点に不満が残る。本書は，社会科学分野にかぎって，オリエンタリズムを乗りこえる知，すなわち「脱オリエンタリズム」の可能性を明らかにしようとして編集されたものである。

その際，第一に考慮されなければならないことは，この概念がさまざまな陥穽へと導きかねないことである。脱オリエンタリズムへの指向がミニ・オクシデンタリズムとして権力的知の再生産を産みだしかねないこと，あるいは世界の画一化傾向が脱オリエンタリズムの成立をどこまで許容しうるかなどの吟味が必要である。

さらに，脱オリエンタリズムがとるべき方向については，執筆者のあいだで意見が二分した。第一の見解は，オリエントという概念自体がオクシデントにより作りだされたものであるから，オリエントに依拠して脱オリエンタリズムを構想することは結局オリエンタリズムの再生産にほかならなくなるとするものである。したがって，この立場の脱オリエンタリズムは，オリエント対オクシデントという二項対立を拒否しなければならない。それにたいして，私も賛成する第二の見解は，オリエントの知の伝統のなかにオクシデントの権力的知の体系を乗りこえる可能性を見いだそうとするものであり，本書では仏教を再評価する三論文が収録された。なお，本書は社会科学研究科所属教員の共同研究成果の報告書をもとに，単行本として編集されたものであることを付記しておく。　　（こまい・ひろし　社会科学系教授）